

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「あーあ、残念だよなあ。せっかく楽しいクラスだったのに、あと二か月で離ればなれか」

その言葉を、ぼくは聞きたくなかった。1をふさいでしまいたかった。

ぼくらの学校では、クラス替えは二年に一度だ。だからもうこのクラスのメンバーは、二年近くもの時間をいっしょに過ごしてきたことになる。

その二年の間、派手な仲間割れや世間で話題のいじめなんかは、一度も起こらなかった。女子のほうでは何度か短期的にその2のことがあったようだけど、男子のほうはいって平和。本当に仲の良い、楽しいクラスだった。それがもうあと二か月ちょっとで終わりだなんて、正直考えたくなかった。

ビデオカメラを片手に持ったまま、最後に教室を出た。みんなは先に廊下を歩いている。ぼくはふとカメラを前に構えて、電源を入れてモニターをのぞいた。薄暗いモニターの中には、廊下を歩いていくクラスのみんなの背中が映っている。十一人、ぼくを入れて十二人。最高に仲の良い、最高に楽しい十二人だ。

だから、とぼくは思う。

中学なんか、行きたくない。このままずっとこのクラスのみんなと、楽しい毎日が続いていけばいい。

そんなことできるわけ絶対ないのに、ぼくはひそかにそう願っていた。

(中略)

いつの間にかぼくは幼稚園のころの姿で、隣には父さんがいた。ぼくの背は父さんの腰くらいまでしかなくて、上のほうにある父さんの顔はよく見えなかった。だけど、Aつないだ骨ばった手の、少し冷たい感触は、間違いない父さんのものだった。

父さんと手をつないで、ぼくは歩いていく。少しだけ春に近い風の暖かさも、足の裏に当たるアスファルトの硬さも、はっきりと感じる事ができた。そしてぼくは道端に植えてある、まだ花の咲かない菜の花の一本にそれを見つけて3を止める。三月月にも似た形をした、濃い緑色の物体。

「ああ、これは蝶のサナギだね。テレビや本で見たことはないかい？」

父さんは懐かしい、そよ風のようなささやき声で言った。

「サナギ？」とぼくはきき返す。ぼくの意味とは関係なく、勝手に声が出ていた。父さんは、そう、とうなずいて、

「サナギというのはね、蝶が幼虫からあのきれいな羽根で飛ぶ大人の蝶になるための、準備をする姿なんだ。サナギの間は、蝶は硬い殻の中に閉じこもってじっとしているんだよ。普通は何週間かで殻から出てきて蝶になるんだけど、冬の間は何か月もサナギのまま動かないこともある」

ふうん、とぼくは生返事をして、目の前のサナギに触れようとする。すると後ろから父さんの手が伸びてきて、ぼくの小さな手をやさしく包みこんだ。

「サナギに触ってはいけないよ。びっくりさせて、起こしてしまうからね」

「サナギは眠ってるの？ ずっと、一人ぼっちで？ そんなのつまらないよ」

ぼくの言葉に、父さんはゆるゆると首を振って、

「ワタルは、サナギの見る夢を知っているかい？」

と言った。ぼくは父さんの顔を見上げた。父さんは続ける、

「サナギはね、夢を見てるんだよ。それはとても不思議な夢で、サナギたちはみんな、同じ夢を見るんだ。だからサナギは、幼虫のころに仲の良かった友だちと、夢の中で会うことができるんだよ。それにその夢の中にはね、サナギたちの楽園があって、そこでサナギは、仲間たちといっしょに、毎日楽しく暮らしているのさ」

だから、サナギはちっとも退屈じゃないし、寂しくもないんだ。と、父さんは言った。

そこでぼくは、こらえきれなくなって叫んだ、

「でもっ、それなら！」

ぼくの声は現在のものに変わっていた。気がつけば声だけでなく姿までもとに戻っていた。ぼくの背は父さんの首のあたりまであった。

「それなら……」

②その先を口にして、ぼくは思いどまった。口にするのが怖かった。

そうだ、たとえ口に出したところで、父さんに尋ねてみたところで、なんの意味もない。③ぼくの願いがかなうことは、決してない。

ぼくはうつむいて、黙っていた。

そんなぼくの頭に、父さんはやさしく手を載せて、Bぼくの髪をなでた。それから、まるでぼくの気持ちなんて全部お見通しのような、父さんの、静かな

声が聞こえた、

「そうだね。けど——」

(中略)

父さんはもう片方の手で、足元の花壇を指差す。まだつぼみの菜の花の花壇。その花壇に向かって、父さんはオーケストラの指揮者みたいに、C手を振る。それが、魔法の合図だった。

ぼくの視線の先で、菜の花のつぼみがみるみるふくらみ、次々にまぶしい黄色の花が咲き始めた。ぼくは驚いて父さんを振り返った。父さんは再び花壇を指差す。ぼくが視線を戻すと、菜の花の茎や葉のところどころに、小さな緑色の光が灯っていた。よく見れば、その光はすべて蝶のサナギだった。深緑色のサナギが光を放ち、その背中がいっせいに割れたかと思うと、中から色とりどりの蝶が姿を現し、われ先にとばかりに空へと舞い上がった。

ぼくは声をなくしてその光景を眺めていた。蝶たちは仲間と遊ぶように、軽やかに、ぼくの鼻先を飛び交っている。耳を澄ませば蝶の笑い声が聞こえるようだった。

「なにかもが、変わってしまうわけではないよ」

隣でふいに、父さんのささやき声が聞こえた。ぼくは父さんの顔を見上げた。

「サナギから蝶になれば、姿かたちは全然違うものになってしまうけど、サナギのときの気持ちが消えてしまうわけじゃない。だからこの蝶たちは、たとえ仲間と離ればなれになってしまうても、いつかまた別の場所で出会ったときには、昔のように心を通わせることができる」

ぼくはもう一度、蝶たちのほうを向いた。さっきまで一つの場所に固まっていた蝶は、しだいに別々の方向へ飛んでいこうとしていた。

「春が来れば、時間が過ぎれば、いろいろなものが変わっていく。でもね、変わらないものもあるんだよ。変わらなずに残しておきたいと強く願う気持ちがあれば、想いや絆はきつと変わらずにそこにあり続けるんだ。それにね」

父さんが言葉を切るのと同時に、春の訪れを告げる強い風が吹いた。風の中で父さんはぼくに向かって、ふわりと微笑んでみせた。——そうだ、そう。父さんはこんなふうに、静かに笑う人だった。

春風に乗って、薄紅色の花びらが降ってきた。ぼくは頭上をあおぎ、そして 4 を丸くした。

そこに、鮮やかなピンク色の天井があった。桜だった。青空を隠してしまうほどの満開の桜が、ぼくと父さんを見下ろしていた。舞い落ちる桜の花びらに交じって、さっきの蝶たちが D ぼくの視線の先を横切っていた。

最後に父さんの楽しげなさやき声が聞こえた。

「それにね、ずっとサナギのままでしたら、こんなきれいな桜を、見逃してしまうじゃないか」

如月かずさ『サナギの見る夢』より（一部、改変があります。）

問一 1 4 に適する、体の一部を表す漢字一字をそれぞれ答えなさい。ただし、同じ語を繰り返し用いることはできません。

問二 A D に適する語の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア そっと イ ひらひらと ウ くるりと エ ぎゅっと

問三 部①「生返事をして」の意味を、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア のんびりと返事をして イ いいかげんに受け答えて ウ 感情を抑えて答えて エ 楽しそうに返事をして

問四 部②「その先を口にしようとして、ぼくは思いとどまった」とありますが、ぼくは何と言おうとしたのですか。「サナギ」という言葉を必ず使って答えなさい。

問五 部③「ぼくの願いがかなうことは、決してない」とありますが、ぼくはどういうことを願っているのですか。わかりやすく説明しなさい。

問六 部④「さっきまで一つの場所に固まっていた蝶は、しだいに別々の方向へ飛んでいこうとしていた」とありますが、これは誰のどのような様子をたえていますか。わかりやすく説明しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

カラスがほんとうに頭がいいなあと感心するのは、採食行動に関連することが多い。たとえば、普通ならば食べられないような、とんでもなく固い物でも **A** を使って食べてしまう。

固い殻で身を守る貝、とくに巻き貝は二枚貝とちがってこじ開けることもできないし、よほど特殊な歯や強いあごがないかぎり、かじっても割ることができない。しかし、そんな頑強な貝殻の防具もカラスの知恵にはかなわない。高いところから落として割ってしまうからだ。ハシボソガラスやカナダ西海岸に棲むヒメコバシガラスなどがこの採食行動を見せる。

クルミの実もそうとう固い。とくにオニグルミは、クルミ割りでも歯が立たず、トンカチでガチーンとやらないと割ることができない。そのためオニグルミを食べられる生きものは、鋭い歯をもつリスとネズミぐらいしかない。ところが、ハシボソガラスはこんな固い実も **A** を使って食べてしまう。

もちろん、トンカチでというわけはないが、貝と同じように高いところから落として割る。貝よりも固いので一回落とすくらいではだめだが、何回も根気よく落とすと割ることができる。このクルミ落とし行動は、クルミがある地方ならば全国各地で見ることができる。

B、このクルミを落とす習性は、学習によるものなのか、それとも本能的な行動なのか、気になるところである。私は、おそらく本能ではないかと思っている。というのも東京都葛飾区にある水元公園にはハシボソガラスがいるが、クルミがほとんどないので実を落とす行動は見られない。 **C**、人がクルミを与える、ちゃんと空から落として割るのである。このことからハシボソガラスのクルミ落としの習性は、ある程度生まれつきもっているものだと考えられる。

D、クルミを落とす高さやどんな地面に落とせば割れやすいかなどは、学習によって獲得していくのであろう。明らかに幼鳥は、クルミ落としが下手だからである。

① ハシボソガラスのクルミ割り法には、もう一つ高度な技がある。走行している自動車に踏ませて割るのである。

車利用のカラスは、これまでに秋田、青森、岩手、新潟、北海道、富山、宮城などで観察されている。海外では、アメリカ西海岸での報告はあるが、はっきりした確証は得られていない。

車利用のカラスが、もっともよく見られるのが、宮城県仙台市内の東北大学川内キャンパス周辺で、日本でいちばんはじめに車利用のカラスが報告された場所でもある。

一九九二年二月、東北大学教授の仁平義明さんは、キャンパス入り口の隅隅交差点で赤信号で停車した。すると一羽のハシボソガラスがクルミをくわえてきて、車のタイヤ前に置いたのである。

この車利用のカラスの行動には、詳細な観察の結果、いくつかのパターンがあることがわかった。

一つは、赤信号などで停車した車のすぐ前にクルミを置く方法で、これはかなりの確実性がある。二つめは、徐行している車の前に急に出て行って強制的に停車

させクルミを置く方法である。かなり無茶なやり方であり、もしドライバーが温厚でなければひき殺されてしまうリスクを伴う。三つめは、走行中の車のタイヤにクルミを投げつける方法。これは安全だが、なかなか成功しない。四つめは、あらかじめ路上にクルミを置いて踏まれるのを待つ方法。五つめは、電線や街灯にとまって上からクルミを落として車に踏ませるやり方である。

車利用には、自分なりのスタイルがあることがわかる。これが遺伝的な行動ならば、機械的に同じ方法をするはずだから、車利用はカラスが頭脳であみ出した技であると考えてもいいかもしれない。

しかも、カラスはかなり効率を考えて車利用をおこなっているのではないかと思えるふしがある。

仁平さんによると、クルミを置く場所には三つの共通点があるという。まず、クルミの木が近くにあること、そして適度な交通量があることである。適度な交通量というのはとても大切なことで、一時間待っても一台しか車が通らなければ、それこそ待ちくたびれてしまうし、バンバン車が通るところでは、危なくて実なんか置くことはできない。適度な交通量というのがいいのである。

三つめの共通点は、交差点、ロータリー、カーブ、急坂などの車が徐行、または一時停止する場所である。ようするに、車がゆっくり走る場所ということだ。車がゆっくりでないとクルミを置くタイミングが難しくなる。また、あまりにも速いスピードでクルミが踏まれると、実は粉々になってしまうし、はじかれてどこかに飛んでいってしまうこともある。だからゆっくりと走る場所でないとだめなのである。

こうして見てくると、^②カラスの車利用の条件はなかなかきびしいのだが、この条件をすべて兼ね備えている場所がある。それは自動車学校である。

東北大学川内キャンパスのすぐ近くに広瀬川が流れている。その河川敷に自動車学校があり、ここではカラスがかなりの頻度で車利用行動をする。たしかに、教習コースは車がとてもゆっくり走る。カーブもあるし、一時停止もたくさんある。さらに、いつでも練習をしているので交通量もちょうどいい。クルミを割ってもらうのには最適な場所なのであろう。

私もこの学校に何回も通い、カラスの車利用行動を観察・撮影しているが、見るたびに感心してしまう。

たとえばカラスは、クルミが踏まれなかったとすると、「今度はこのへんかな？」といった感じで、嘴で微妙に位置をずらして調整をする。どうもカラスは車の動きを予想しているようである。このようなカラスの行動を見るのはじつに楽しい。うまく実がひかれてパン！と音がしたときには、思わず拍手したくなる。

そういえば、教官からおもしろい話を聞いた。

「私はカラスがクルミを置くと、教習生に踏めといっているんだよ。タイヤの位置を知りたい訓練にもなるからね。けっこう難しいんだよ」

私も挑戦してみたことがあるが、たしかにけっこう難しい。タイヤのある位置がわからないのである。この自動車学校では、^③カラスも教官なのである。

柴田佳秀『カラスの常識』より（一部、改変があります。）

問一 本文中の A には二つとも同じ語が入ります。適する語を、本文の——部①より前の部分から二字で抜き出して答えなさい。

問二 B D に適する語を、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア だから イ しかし ウ または エ ただし オ すなわち カ ところで

問三 ——部①「ハシボソガラスのクルミ割り法」には、高いところから落として割る方法と、車を利用する方法があります。それが生まれつき持っている習性ならア、そうでないならイとそれぞれ答えなさい。また、そう考えられる理由を、本文中の言葉を用いてそれぞれ答えなさい。

問四 ——部②「カラスの車利用の条件」とは、どのような条件ですか。本文中の言葉を用いて四十字以内で答えなさい。(句読点も字数に含みます。)

問五 ——部③「カラスも教官なのである」というのはなぜですか。説明しなさい。

三 次の1～5の鑑賞文は、松村由利子『語り出すオブジェ』から抜き出したものです。これらは、後のア～オのうち、どの短歌についてものですか。それぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を繰り返し選ぶことはできません。

- 1 この歌の作者は、両親と進路か何かについて話し合っていたのだろうか。少しの意見の違いはあったけれども、大筋では意見がまとまったのだろう。
- 2 暮らしの中の根源的な部分が失われてしまったことを嘆いているのではないだろうか。便利さは何かと引き換えになっている。
- 3 すべて自分の行いは、自分が一人で責任をとらねばならないのである。人は孤独であるということが、しんと伝わってくる歌といえよう。
- 4 この歌は、「予感」というものの哀しさ、人生に対する無力さが詠われているようで切なくなる。
- 5 作者は本当には絶望していないのだろう。歌全体に、そこはかとなく照れ笑いのようなものが感じられるからだ。

ア 人間が水を運ぶということのこのごろ減りて馬穴は売れず	棚木恒寿
イ 下敷きを重ねるように同意する ポットのお湯も沸きはじめたり	安藤美保
ウ おねがいねって渡されているこの鍵をわたしは失くしてしまう気がする	東直子
エ 五歳の頃ドブに流れたお気に入りハンカチあれが人生だった	森本平
オ すれ違ふ誰ひとりとして今朝われがミルクこぼしたことなど知らぬ	香川ヒサ

四 次の文章は、中学生になった花子さんが、小学校の担任の先生を訪ねたときの会話です。――部①⑤の敬語の使い方が、正しい場合は○をつけ、まちがっている場合は正しい形に直しなさい。

花子さん「佐藤先生はおりますか。」^①

先生「花子さん、久しぶり。すっかり中学生らしくなったね。」

花子さん「先生、お久しぶりです。遅くなりましたが、卒業式で撮った写真を持ってきました。ぜひ拝見してください。」^②

先生「よく撮れているね。ところで、中学生生活は充実しているかな。」

花子さん「はい。もうすぐ文化祭があります。先生にもチケットをくださるので、お越しください。」^{③④}

姉も先生にお会いしたいとおっしゃっています。」^⑤

先生「ありがとう、必ず行くよ。」

五 次の――部のカタカナを漢字に直して書きなさい。

1 薬局でゲネツ剤を買う。

2 飛行機をソウジュウする。

3 キソク正しい生活を送る。

4 森の中でシンコキウをする。

5 明るくホガらかな人柄だ。

6 イチジルしい発展をとげる。